

羅生門 芥川龍之介

ある日の暮方の事である。一人の下人（げにん）が、羅生門（らしょうもん）の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗（にぬり）の剥（は）げた、大きな円柱（まるばしら）に、蟋蟀（きりぎりす）が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路（すざくおおじ）にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠（いちめがさ）や揉烏帽子（もみえぼし）が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風（つじかぜ）とか火事とか饑饉とか云う災（わざわい）がつづいて起った。そこで洛中（らくちゅう）のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎いて、その丹（に）がついたり、金銀の箔（はく）がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪（たきぎ）の料（しろ）に売っていたと云う事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸（こり）が棲（す）む。盗人（ぬすびと）が棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまったのである。

その代りまた鴉（からす）がどこからか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鷗尾（しび）のまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻（ごま）をまいたようにはっきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄（ついば）みに来るのである。——もともと今日は、刻限（こくげん）が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞（ふん）が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖（あお）の尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面皰（にきび）を気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと云う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微（すいび）していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小

さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」と云う方が、適当である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申（さる）の刻（こく）下（さが）りからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差当り明日（あす）の暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあっと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した薨（いらか）の先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいる違（いとま）はない。選んでいれば、築土（ついじ）の下か、道ばたの土の上で、饑死（うえじに）をするばかりである。そうして、この門の上へ持って来て、犬のように棄てられてしまうばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊（ていかい）した揚句（あげく）に、やっとこの局所へ逢着（ほうちゃく）した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「盗人（ぬすびと）になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きな嚏（くさめ）をして、それから、大儀（たいぎ）そうに立上った。夕冷えのする京都は、もう火桶（ひおけ）が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗（にぬり）の柱にとまっていた蟋蟀（きりぎりす）も、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、頸（くび）をちぢめながら、山吹（やまぶき）の汗衫（かぎみ）に重ねた、紺の襖（あお）の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患（うれえ）のない、人目にかかる惧（おそれ）のない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った梯子（はしご）が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄（ひじりづか）の太刀（たち）が鞘走（さやばし）らないように気をつけながら、藁草履（わらぞうり）をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子（よう

す)を窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿(うみ)を持った面皰(にきび)のある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括(くく)っていた。それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛(くも)の巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮(やもり)のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平(たいら)にしなが、頸を出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗(のぞ)いて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸(しがい)が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土を捏(こ)ねて造った人形のように、口を開(あ)いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にくろがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に唾(おし)の如く黙っていた。

下人(げにん)は、それらの死骸の腐爛(ふらん)した臭気に思わず、鼻を掩(おお)った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲(うずくま)っている人間を見た。檜皮色(ひわだいろ)の着物を着た、背の低い、瘦(や)せた、白髪頭(しらがあたま)の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片(きぎれ)を持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時(ざんじ)は呼吸(いき)をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身(とうしん)の毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱(しらみ)をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行った。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。——いや、この老婆に対すると云っては、語弊（ごへい）があるかも知れない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さっき門の下でこの男が考えていた、餓死（うえじに）をするか盗人（ぬすびと）になるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片（きぎれ）のよように、勢いよく燃え上り出していたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であった。勿論、下人は、さっきまで自分が、盗人になる気でいた事などは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そうして聖柄（ひじりづか）の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは云うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩（いしゆみ）にでも弾（はじ）かれたように、飛び上った。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞（ふさ）いで、こう罵（ののし）った。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ※（「てへん+丑」、第4水準 2-12-93）（ね）じ倒した。丁度、鶏（にわとり）の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘（さや）を払って、白い鋼（はがね）の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球（めだま）が※（「目+匡」、第3水準 1-88-81）（まぶた）の外へ出そうになるほど、見開いて、唾（つば）のように執拗（しゅうね）く黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後（あと）に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円

満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云った。

「己（おれ）は検非違使（けびいし）の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄（なわ）をかけて、どうしよう云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居たのだか、それを己に話しさえすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じっとその下人の顔を見守った。※（「目+匡」、第3水準1-88-81）（まぶた）の赤くなった、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でも噛んでいるように動かした。細い喉で、尖った喉仏（のどぼとけ）の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉（からす）の啼くような声が、喘（あえ）ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わって来た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢（かずら）にしよと思うたのじや。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑（ぶべつ）と一しょに、心の中へはいつて来た。すると、その気色（けしき）が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、墓（ひき）のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。

「成程な、死人（しびと）の髪を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸（しすん）ばかりずつに切って干したのを、干魚（ほしうお）だと云うて、太刀帯（たてわき）の陣へ売りに往（い）んだわ。疫病（えやみ）にかかって死ななんだら、今でも売りに往んでいた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料（さいりょう）に買っていたそう。わしは、この女のした事が悪いとは思っていぬ。せねば、饑死をするのじゃて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、饑死をするじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるである。」

老婆は、大体こんな意味の事を云った。

下人は、太刀を鞘（さや）におさめて、その太刀の柄（つか）を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面皰（にきび）を気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いている中に、下人の心には、ある勇気が生まれて来た。それは、

さつき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、またさつきこの門の上へ上って、この老婆を捕えた時の勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと云う事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きっと、そうか。」

老婆の話が完（おわ）ると、下人は嘲（あざけ）るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面炮（にきび）から離して、老婆の襟上（えりがみ）をつかみながら、噛みつくようにこう云った。

「では、己（おれ）が引剥（ひはぎ）をしようと思ひまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色（ひわだいろ）の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行った。そうして、そこから、短い白髪（しらが）を倒（さかさま）にして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々（こくとうとう）たる夜があるばかりである。

下人の行方（ゆくえ）は、誰も知らない。